

## 研究グループ——幅広く掘り深い学問の庭

国際文化研究科の中では、多彩で学際的な研究グループが結成され、自由な共同の討議を重視する活動が進められています。近接する研究分野の複数教員と院生たちが集い、狭義の専門分野を超えた共通の土俵において、自主的な研究発表を軸に発言し合う場です。幅広く掘り深い学問の庭への参加を実感してください。

## 平成 29 年度研究グループ一覧

グループ名	代表者	構成員
多文化社会と言語	東 弘子	東 弘子、糸魚川 美樹、宮谷 敦美、小池 康弘、高阪 香津美、渡会 環
学際的フランス研究	中田 晋自	天野 知恵子、佐藤 久美子、野内 美子、原 潮巳、伊藤 滋夫、長沼 圭一、中田 晋自、岸本 聖子
国際関係論の歴史的アプローチ	奥田 泰広	奥田 泰広、木下 郁夫
地域多様性のフィールド学	竹中 克行	竹中 克行、中島 茂、服部 亜由未、井戸 聡
歴史学の潮流	上川 通夫	上川 通夫、大塚 英二、丸山 裕美子、奥野 良知
カタルーニャから考える地域と国家	奥野 良知	糸魚川 美樹、奥野 良知、竹中 克行
人類学研究グループ	亀井 伸孝	秋田 貴美子、奥野 良知、亀井 伸孝、杉山 三郎、谷口 智子、エドガー・ライト・ポーブ

## 研究グループ活動風景

愛知県立大学 国際文化研究科 大学院合同ゼミ  
 テーマ：関西の町並み保存と住民意識の変遷  
 日時：2017年5月24日(水) 17:40~19:20  
 場所：日408教室

▲カタルーニャから考える地域と国家

▲院生・教員の共同執筆論拠

▲巡礼路のランドスケープ分析

地理学報告  
2015年12月25日 第117号

▼多文化社会と言語

## 多文化社会と言語

人やモノ・情報が簡単に国境を越えて移動する現代において、世界各地で社会の多文化化・多言語化が進んでおり、日本も例外ではない。本研究グループでは、社会言語学、日本語教育、人類学、多文化共生といった立場から、主に日本国内の多文化状況と言語にかかわるさまざまな現代的な課題を取り上げ、調査・分析を進める。具体的には、地域社会とエスニック集団の動態、多文化共生施策の研究、コミュニティ通訳、情報保障、外国にルーツを持つ人びとへの日本語（学習）支援、などが課題となる。

過去の修士論文のテーマ

公共交通機関における多言語表示—名古屋市営地下鉄の駅を事例として (2016)  
外国人労働者に対する受入国における言語教育諸国との比較から見る日本の技能実習制度に関する考察 (2015)

日中ビジネス場面でのコミュニケーション問題の分析—中国のビジネス日本語教育の改善に向けて (2014)

インドネシア語翻訳版 manga における日本語起源の借用語 (2013)

家族滞在型在日韓国人の子どもに対する言語教育 (2010)

韓日間異文化コミュニケーションとしてのビジネス日本語—ビジネス日本語教材の分析と KB・JB の意識調査を通じて (2010)



### 参加者の声

国際文化専攻 博士前期課程 2年 三浦加奈絵

「国際文化特別演習 b」では「多文化社会と言語」を主題に掲げ、各自の研究テーマについて発表を行い議論し合います。様々な年代、経歴、研究分野の学生と教員が集うため、一人の発表について多方面からさまざまな意見が寄せられます。厳しさもありますが大変刺激的で、参加するのが楽しみです。率直な意見や指摘だけでなく、ささいな疑問から新たな視点や考えが生まれるなど、自身の研究につながる「生の声」が現場で得られるよい機会となっています。



## 国際関係論の歴史的アプローチ

21世紀の世界秩序は、アメリカの相対的優位が後退するなかで大きく変容する可能性を秘めている。そうしたなかで世界秩序の将来を見据えようとするれば、従来の国際関係論の手法にとどまることなく、これまで以上に歴史研究の蓄積を踏まえたマクロな考察が必要となってくる。この研究グループは、歴史研究のこれまでの成果を生かしながら、現在さらには将来をも意識した世界秩序の分析を行う。

発足したばかりという事情があり、平成29年度7月に開催される学部生・大学院生合同ゼミが最初の活動となる。

## カタルーニャから考える地域と国家

典型的な国民国家とされるフランスと国民形成にいわば失敗した国とされるスペインの両者にまたがって位置するカタルーニャは、ヨーロッパの多様性、スペインやフランスの多様性を今に伝える存在で、国民国家・地域・マイノリティーナショナリズムというような問題を考えるうえで、とても貴重なフィールドだといえる。また、同地は強い集合的アイデンティティを有する地域であると同時に、相対的に多様性と寛容度の高い社会だとも言われている。本研究グループでは、社会言語学や地理学や歴史学などの近接する多様な分野のメンバーが、カタルーニャというフィールドを通してグローバル化する世界のなかでの多様性や多文化の共生などについて議論・研究を行っている。

## 歴史学の潮流

歴史学には本質的にグローバルとローカルの視点がある。世界史的な比較、接触地域間の連関確認、日常生活における普遍性の発見、などである。そのこと考えなくても考証論文は書ける。とはいえ、史料に付着する主観、先行研究の認識枠組み、研究主体の世界観などから自由になるには努力がいる。そこで、「すべての歴史的認識は現代史的認識である」という鉄則にあらためて向き合い、研究潮流の由来と問題を掘り下げ、歴史学の行方を考えたい。



### 参加者の声

国際文化専攻 博士前期課程 1年 竹内めい

私は現代カタルーニャ美術を代表する画家であるジュアン・ミロについて研究しています。本研究グループの先生方との議論や大学院合同ゼミでの議論から、素晴らしい刺激を日々得ています。

## 人類学研究グループ

フィールドワークに根差した文化人類学的研究を中核分野としつつ、自然人類学、言語人類学等を含む「総合人類学」の幅広い見地と素養のもと、人間理解を進めることを目指す。これらは、人文社会諸科学の基礎を成す認識と知識であり、文化人類学の専門性を高めたい学生のほか、社会学や言語学、地理学などの隣接分野の専攻学生の参入を歓迎する。

社会調査の技法と倫理に習熟し、自ら調査を実践できる人材を目指すとともに、研究成果の社会還元、公共性を念頭に置いた知識の実践的活用に関心を向けた議論を行う。

## 学際的フランス研究

本グループでは、フランスの歴史、文学、文化、芸術、思想、言語、政治、経済、社会などを研究対象とする大学院生を広く受け入れ、当該院生が本グループの教員による学際的なフランス研究の授業やゼミを受講するなかで、フランス語文献の読解力をはじめとするフランス語の運用能力はもとより、フランスに関する幅広い知識を習得し、より学術水準の高い修士論文や特定課題研究の作成・提出を目指している。



愛知県立大学図書館 新村文庫  
(フランス文学者の故新村猛  
名古屋大学名誉教授より寄贈)

## 地域多様性のフィールド学

本研究グループでは、人・モノ・情報・資本が飛び交うグローバルフローの渦中に置かれ、そうしたフローとのやりとりから活力を吸収するローカルな地域・社会の動態について研究している。グローバル世界の中の地域多様性を発見し、培うための研究実践に到達することが大きな目標である。

研究の方法論として、地理学、地域社会学など、フィールド調査に重きを置く現場主義を共有し、人類学などの近接分野と協力しながら、大学院合同ゼミを運営している。また、サンティアゴ・デ・コンポステラ大学（スペイン）の協力を得て取り組んでいる巡礼路のランドスケープ調査は、教員・院生・学部生が参加する研鑽の場となっている。このような活動を通じて、研究、教育、行政などの領域でグローバル化時代の地域づくりに主体的な役割を果たせる人材を送り出すべく努力している。



学部生を交えたフィールド活動

### 参加者の声

毎月開催される院合同ゼミは、院生が自身の研究について報告し、その内容について先生方、他の院生を交えてディスカッションをする場となっています。他の院生の報告を聞くことは刺激になります。指導教員だけでなく様々な先生方からのアドバイスを通じて研究をブラッシュアップできる、貴重な場であると感じています。

出口幸希さん



日本文化専攻  
博士前期課程 2年